

教育の重さ……そして子供が危ない

教育は生命と同じ重さをもっています

アリスを開校して3回目の受験を目前に控えた今、改めて想うことは「ご両親がしっかりとしたビジョンをもって子供を育てること」の大切さです。

夏期講習の直前に「やっぱり小学校受験をしたいのですが、間に合うでしょうか?」「今、通っている教室が信頼できなくなった」等々、さまざまな不安や悩みを抱えて、多くの皆さんがご相談に見えますが、なぜもっと早い時期に、お父さんお母さんが考えてあげたり、しっかりと見抜いてあげられなかったのか……と悔やまれてなりません。

受験というのは、その子の能力や資質だけで合格するものではないからです。そして、教育というものは効果が出てくるまでに時間がかかるものだからです。子供を取り巻く教育環境が重要なのです。どのような環境を選んであげるのか、という判断は親の責任です。

近年、それらに関するいくつかの気になることがらがあります。その1つが発音です。

新年中、新年長で入会してくる子供達は、実際は年少・年中なのですが、その時点でカ行、サ行、タ行等の幼児発音が残っている子供が増えています。特にトレーニングしなくても、時期がくれば自然に直る場合もありますが、受験という限られた時間の中、特に私は読書等の言語指導を行っておりますので、とても気になります。

では、なぜそうした発音があいまいなお子さんが増えているのでしょうか。これは私の推察ですが、テレビ、ビデオ、DVD、CD、テレビゲーム、コンピューター、携帯電話などのIT化が進み、私達の生活環境がどんどん変化してゆく中で、子供を取り巻く音の変化が起こっているからではないでしょうか。つまり機械音の影響が大きいと思われます。裏を返せば、言葉を覚える大切な時期にお母さんの口の動きを見て、真似て話すという時間が少なくなっていないかということです。

お母さんが腕に抱いて顔を見てゆっくりと繰り返し繰り返し大きく口を動かして見せながら話してあげる前に、勝手に耳から早口の言葉が音として入ってきてしまう状況は好ましいはずはありません。

テレビやカーステレオ等、無意識でかけている音が赤ちゃんの耳を先に占拠し

てしまっている危険があるのではないかと私は思っています。日本語が確立する前に、同時に英会話をはじめるとも影響しているのかもしれませんが。

次に「生活体験が少ない」ことです。生活の中で見たり聞いたりしているものの名称や用途を知らない。

さわったり使ったことがない。または、そこから発展した知識を得られていない。

これは親御さんが意識をもって伝えていないのです。

子供自身の中に「これは何？」という疑問や「こうやってみたらどうかな？」という発想する機会がないままに育ってきてしまったという感じがします。以前は私が「これなあに？」と提示すると、名称だけでなく「あのね、こうでね」「ああでね」といろいろな言葉が子供達の口々から出てきたものですが、最近では「ふうーん」と不思議そうに聞いている子が多いですね。

そうした状況の方が私には不思議でなりません。

家のまわりを一回りしただけで、子供達はいろいろな“？”を見つけたり、さまざまな発想をふくらませ、創造するものです。

その体験や機会が失われているように思います。

さらに、「リズム感がない」「しっかりと立ってられない」「反応が遅い」等々、これらは車での移動が多くなり、車内での自由な姿勢が習慣になってしまっていることや、外遊びの時間が少なくなり、昔ながらの考えられた遊びをしなくなったことが原因ではないかと考えられますが、私としては徐々にではあります、子供達の中に起こっている変化のいくつか、ある事由に起因しているのではないかと推測しています。

つまり、これらのすべては、子供達の生活が忙しすぎて、親子（特に母親）で遊ぶ時間が少なくなっているからではないでしょうか。

そして、習い事に通うことに慣れすぎていて、“そこに参加しているだけ”になってはいないだろうかという疑問を抱いています。

私はあまり早い時期から、また多くの習い事に通わせるのは、むしろ子供の意欲を分散、減退させるのではないかと危惧しています。

子供達に問えば、きっと「楽しいからやめたくない」と言うでしょう。

「だから通わせているんですが……」と答える親御さんがほとんどです。

しかし、そこには親の教育的信念というものが存在していない。

やはり子育てにおいては、まず第一に「どういう子供に育てたいか」という親の願いがあり、それに基づいて「では、どうしたらよいのか」という方法論が

導き出されてくるものです。ですから、そのために家庭では一を大切にしようとか、一だけは守るとか、一はしてはいけない、といった教育方針をご両親でしっかりと掲げ、それを子供達が理解し、実践していく中で、親の愛情や想い、期待、倫理というものを伝え、諭し、導いていくことが子育てのあり方であろうと考えます。

それ故、ましてや親の手から離して他人に預ける習い事に関して、あまりに安易に選択してはいないだろうか、と警鐘を鳴らしたい。

誰しも思うことは、その子供にとって両親以上の絶対的な愛情を注げる人間はいないということです。

その母親との大切な時間を減らしてまでも通わせるだけの価値と意義が本当にあるのかどうかを、今一度問うてみてください。

そうでなければ、あれもこれも習っているという親の自己満足や見栄にすぎないこととなります。

「私達はこういう子供に育てたい。だからこそ家庭や両親だけからでは得られない〇〇を学ばせたい」というはっきりとした目的と目標をもって始めなければ、とりあえず続けているだけのものになり、前述した気力や意欲も持たずに流される（その時間を過ごす）ことに慣れてしまい、お友達に会えて楽しかったというだけになってしまいます。

少々厳しい事を申しましたが、もちろん一人っ子でお友達とのかかわりが少なかったり、仲間に入るのに時間がかかる消極的なお子さんに、社会性をつけさせたいという目的で何かを習わせることは、それだけで大きな意義があるわけです。

私が申し上げたいのは、習い事一つひとつに対して、きちんと親としての子供への願いや教育的な考えが存在すべきだということです。

人は一度にいくつもの事に集中できるとは思えません。

どれも適当にこなして中途半端でも「できました」という子、途中であきらめてしまい持久力のない子、すぐに「できない」と人に助けを求める依頼心の強い子が増えてきており心配です。

それは、親御さんが「お友達も習っているからかわいそう」とばかりに、お子さんのためにと考えてしていることが、かえって子供の集中力や目標に向かって淡々と努力する強い心が育たない環境を作っているのかもしれない。

決してお金で安心は買えないのです。

お母さんとの時間をもっと大切に、もっとたくさん作りましょう。  
子供の成長と共にその時間はどんどん少なくなっていくのですから。お父さん  
お母さんがお子さんに伝えたいものを持ちましょう。

そして、愛する大切な我が子を預ける教師や教室を、志望校選びと同様にもつ  
ともっと慎重に選択すべきだと提案します。  
それが冒頭で述べた悲劇を二度と繰り返さない唯一の道であると思います。  
学校が各々に教育理念を掲げておられるように、教育に携わる教室や教師には  
自身の教育観や教育的信念というものがあるはずです。  
経歴や経験はもとより、それらがご両親の考えと一致しているのか、ご両親自  
身が学びたいと思えるだけのものを持った人格であるのか、きちんと子供の目  
線に立った指導や内容であるのかということをしつかりと見抜いてお預けしな  
ければ、教師が子供に与える影響がいかに多大であるかを考えると、とても怖  
いものがあります。

それ故、私は日々教師であることの重圧、この重い責任を果たすために全授  
業を公開して、ご両親に評価していただき、試行錯誤を重ねて努力しています。  
そして教育現場を参観し、多くの教育者の方々とお話をさせていただき学ばせて  
いただいています。

私は一生を通して教育であり、一生が学びであると考えます。

だからこそ、幼児期に一つのことを一生懸命努力して達成した喜びを知った子  
供は、必ず他のことにも頑張れるし、学ぶことを楽しめる子供になれるはずで  
す。それを子供自身に学びとって欲しいと願って、毎日子供達と向き合ってい  
ます。

私の想いはアリスの子供達に伝わり、今、自分自身で「立派な1年生になりた  
い！」と強く願って元気に頑張っています。

その姿は私にはとても健気で、限りなく愛しい。それはお父さんお母さんがそ  
う願い、そして自分を一生懸命励ましたり応援してくれていることを実感して  
いるからです。

このように子供が自ら生き生きとして学ぶ、つまり子供主体の教育でなけれ  
ば本当の意味で学べる子供にならないのです。

やらされている、なんとなくやっている子供をつくってはならない。

そのためにはお母さんが送り迎えで忙しく走り回る事より、「私があなを誰  
よりも愛しているのだから」と自信をもって子供と向き合うことです。

子供にとって、お父さんお母さん以上の存在はあり得ないのですから。